

第七八號



件		番		受	
名		號		領	
大正		大正		大正	
年		年		年	
十月十九日		八月三十日		七月廿一日	
房官臣大		課局務主		裁決	
了結領受		出提領受		號番	
大正		大正		大正	
年		年		年	
十月十九日		八月三十日		七月廿一日	
長		局		帶	
主務局長		參事官		次官	
主務課長		高級副官		主務副官	
主務課員		主務副官		主務副官	
者記筆案審		者記筆案審		者記筆案審	
者記筆案審		者記筆案審		者記筆案審	

狙撃砲取扱法附図送付方件

兵器局銃砲課

陸 普

通 牒

副官ヨリ

技術審査部長

狙撃砲

取扱

法

草案

添附ス

ハ

附

回

百

貳拾部

至急

調

製

送付

相成

度

候

也

右圖面送付

及陸軍省

取扱法印刷

完

成ノ上

左案

決定

行

相成

度

狙撃砲

取扱

法

草案

送付

ノ

件

陸 普 密

通

牒

陸軍省

陸密第三一八

號

十月七日

及陸軍省

別

紙

配

表

省所

ノ

部

及

狙撃

砲

取扱

法

草案

部

及

送付

候

條

配

賦

方

取

計

相

成

度

候

也

1224

兵器本殿 大東元砲兵工廠 技術審査部行ハ本文件ハ内
ノ除ク

相學範

取扱法ハ別冊草案ニ依リ百貳拾部官房ニ於テ印
刷ニ技術審査部ヲ送付ノ附同ト念殿ニ定成相成
度

陸
軍

狙撃砲取扱法配賦表		配賦箇所	分
浦潮軍	軍司令部 師司令部	一	各
第三師団	一	各	一
関東都督府	陸軍部 師司令部	一	各
朝鮮軍	軍司令部	一	各
留守第三師団	一	各	一
留守第七師団	一	各	一
留守第十一師団	一	各	一
兵器本廠			
教育總監部	本部 歩兵学校二		
		野戦砲兵廠	計
			七
			六
			七
			三
			五
			五
			五
			三
			一
			三

						東京砲兵工廠	大阪砲兵工廠	技術審査部	計	豫備	合計	豫備ハ銃砲課、下付相成度
						三	二	一	七	五	一	

輕迫撃砲取扱法配賦表		配賦箇所	分	師団司令部	歩兵聯隊	野戦砲兵廠	計
浦潮軍	軍司令部	一	各	一			七
第三師団	陸軍部 師団司令部	一	各	一			六
関東都督府	軍司令部	一	各	一			七
朝鮮軍	軍司令部	一	各	一			三
留守第三師団		一	各	一			五
留守第七師団		一	各	一			五
留守第十一師団		一	各	一			五
兵器本廠							一
教育總監部	本部 步兵學校二						三

1228

										東京砲兵工廠	✓
										大阪砲兵工廠	✓
										技術審査部	

1229

秘

狙撃砲取扱法草案

秘

昭和

九月七日

石井

中

1230

2

狙撃砲取扱法草案

目次

2 總説

第一部 構造機能及用途

3 第一章 砲車及同屬品

1 第一節 砲身

2 第二節 閉鎖機

3 第三節 砲身托架

4 第四節 砲架(大架、小架、搖架)

5 第五節 防楯(上方防楯、下方防楯)

6 第六節 車軸、車輪

頁

第七節 照準機(方向照準機、高低照準機)	第八節 駐退機	第九節 砲車屬品	第二章 屬品箱及同裝填品	第三章 器具箱及同裝填品	第四章 彈藥箱及彈藥筒	第二部 取扱法	第一章 分解及結合法	第一節 制限	第二節 分解及結合法	第三節 分解搬送ノ爲行フ分解及結合法
-----------------------------	----------------	-----------------	---------------------	---------------------	--------------------	----------------	-------------------	---------------	-------------------	---------------------------

3

3	附録	2
3	狙撃砲數量表	
3	第二章 取扱上ノ注意	
3	第三章 射撃上ノ注意	
4	第四節 駄載卸下ノ爲行フ分解及結合法	

狙撃砲取扱法草案

3 總説

第一 本砲ハ駐退機ヲ有スル砲身後坐式火砲ニシテ砲車

ハ左ノ主要部ヨリ成ル

砲 砲身及砲身托架ヨリ成ル

砲身ハ鋼製ニシテ其ノ下面ニ二箇ノ準梁ヲ有シ砲身

托架ト連結スルニ供シ開鎖機ハ半自動垂直鎖栓式ニ

シテ復坐ト共ニ開キ空薬莖ヲ蹴出シ装填ト共ニ開鎖

スルモノトス

口徑三十七粒(隔牆上)全長一米。四。即チニハ口徑

砲身托架ハ砲身ト搖架トノ中間ニ位シ砲身ヲ駐退機
 ニ連繫スルノ用ニ供セラル之カ爲砲身托架ノ後端下
 部ハ連結臂ヲ成形シ駐退機ト連結スルニ供ス
 砲架 搖架小架及大架ノ三大部ヨリ成ル
 搖架ハ小架上ニ在リテ上部ニ砲ヲ安置シ内部ニ駐退
 機ヲ收容ス
 小架ハ搖架ト大架トノ中間ニ在リテ此ノ兩者ヲ連繫
 シ高低方向兩照準ヲ行フヘキ媒介部タリ
 大架ハ所謂本然砲架ニシテ前部ニ車軸ヲ具ヘ架尾ニ
 駐鋤ヲ附シ下面ニハ防楯駐鋤ヲ有ス車輪ハ中徑。米
 七。轍間距離。米七六。ナリ

高低照準機ハ大架小架ニ連繫シテ位置シ砲車ノ姿勢
ニヨリ左ノ如キ俯仰ヲ砲身ニ賦與スルコトヲ得

高姿 仰角ニ〇度ヨリ俯角ニ二度迄

中姿 仰角一五度ヨリ俯角ニ一度迄

低姿 仰角七度ヨリ俯角一七度迄

方向照準機モ亦大架小架ニ連繫シテ位置シ架尾ヲ動
カスコトナク左右各約五度ノ方向角ヲ變移スルコト
ヲ得

駐退機ハ搖架匡内ニ在リテ砲身托架ト連結シ發射ス
ルヤ砲身ノ後坐復坐ノ景況ヲ適良ナラシム

防楯 上方及下方ノ兩部ヨリ成リ共ニ其ノ厚サ三セリナ

上方防楯ハ支脚ヲ以テ車軸上ニ防楯支柱ヲ以テ大架
 ニ連結ス
 下方防楯ハ其ノ下端ニ二箇ノ踵鉸ヲ有シ射撃間砲車
 ノ前方支脚ヲ爲ス踵鉸ニハ駐杭ヲ挿入スル孔ヲ有シ
 必要ニ際シ植杭シテ安定ヲ良好ナラシムルニ供ス
 下方防楯ハ車軸周ニ旋回ヲナシ得ルヲ以テ其ノ位置
 ニ依リ砲身軸部高ヲ最高。米七最低。米三五ノ間ニ
 種々變スルコトヲ得其ノ規準トナスヘキ三種姿勢ノ
 砲身軸部高左ノ如シ
 高姿 約。米七

中姿 約〇米六
低姿 約〇米三五

第二 砲車ハ車輪及上下兩防楯ヲ脱シ車軸ヲ以テ胸牆又ハ適當ナル掩體ニ依托シ射撃スルコトヲ得此ノ場合ニ於ケル砲身軸高及最大俯仰角ハ依托物ノ高サニ依リ變化ス
第三 照準ハ表尺眼鏡ニ依ル表尺ハ距離二千五百米ニ至ル分畫及方向修正ノ爲左右各十五分畫(半徑ノ十分數)ヲ刻ス

第四 屬品ハ其ノ一部ヲ砲車ニ附著シ一部ハ一箇ノ屬品箱ニ收容シテ砲車ト共ニ殘餘ハ器具箱ニ收容シテ彈藥分隊ニテ運搬ス

屬品箱ハ一砲車毎、一箇發具箱ハ二砲車毎ニ一箇トス

第五 彈藥ハ彈藥箱ヲ以テ運搬ス一彈藥箱ニハ兎全彈藥
筒ニ十箇ヲ收容ス

彈丸ハ破甲榴彈ノ一種ニシテ着發信管ヲ裝着シ黃色藥(三十
五瓦)ヲ填實ス其ノ全備彈量七百五十瓦ナリ又裝藥ハ一號方

形藥八十瓦ヲ用テ初速五百三十米ナリ
最大射距離
射線ハ約五千米ニ達スルモ確實ニ射彈ヲ觀測スルニハ通

常千五百米以内ナルヘシ

天候及土質ニ因リ異ルヲ號

第六 砲車ノ全重量ハ約百七十五瓦ナリ

第七 砲車ノ運搬ハ左ノ方法ニ依ル

一 長距離ノ運搬ニ在リテハ砲車ヲ其ノ儘一輪車ニ

積載シ(第十一圖)又ハ砲車及屬品ヲ駄馬ニ頭ニ分解駄載ス

輜重車ハ凡ヲ三入式ヲ用フ

二 近距離運搬ハ車輪ヲ裝シ砲車ニ肩綱ヲ附シ二人ニテ輓曳ス

三 短距離ニ在リテハ砲車ヲ分解シテ七人ヲ以テ擔行スルコトヲ得

分解搬送ニ於ケル各部ノ重量概略次ノ如シ

砲身

四十二觔

揺架合成體(砲身托架)ニ十九觔

大架合成體(車軸ヲ含ム)四十六觔

1240

上方防楯
下方防楯
車輪(三箇)

十六
十九
二十三

3
4
第一部 構造機能及用途

第一章 砲車及同屬品

5
第一節 砲身第三圖及第四圖

第八 砲身ハ特種鋼製ニシテ外部ヲ栗色ニ錆染ス(當分ノ
内黒色ニ錆染ス)口徑三十七粒全長一米。四。ナリ
砲尾ニハ貫穿セル垂直方窓ノ鎖栓室ヲ有シ其ノ左右内側
面ニ抽筒子室ヲ又後方上面ヲ圓削シテ裝填孔ヲ設ク砲尾
端末ニハ圓筒形ノ突出部ヲ有シ其ノ後端面ハ發條蓋ニ接
シ突出部ノ内部ニハ擊鐵發條螺桿ヲ收容ス發條蓋ニ接ス
ル部ニハ入筒ノ小斜缺部ヲ設ケ發條蓋ノ突起部ト相
ツ其ノ戻回ヲ防グ

鎖栓室前方藥室ノ下方ニ於テ横孔ヲ貫穿シ臂軸ヲ收容ス
 臂軸室ノ左端ハ起動臂室ヲナス起動臂室ト連ナリテ逆鉤
 準溝及逆鉤發條室ヲ設ケ逆鉤及逆鉤發條ヲ收容ス
 砲尾上面ニハ象限儀ヲ据ユヘキ矩形平面部ヲ有シ砲尾兩
 側面ニハ臥載ニ際シ擔提ノ砲尾受ヲ挿入スヘキ縱溝ヲ設
 ケ右側面ニハ擔提ノ砲尾受ヲ挿入スヘキ縱溝ヲ設
 ケ砲身ノ下面ニハ前方及中央ニ準梁ヲ後方ニ準面ヲ設ケ
 テ砲身托架上ニ安置シ前方準梁ニハ結合栓ヲ挿入シテ砲
 身托架ト連結ス
 砲口部ハ其ノ肉厚ヲ増大シテ砲口帶ヲ成形シ砲口前面ニ
 ハ腔綫番號及縱横ノ標線ヲ刻ス
 第九 腔綫 傾度六度ノ右轉綫ニシテ其ノ數十六腔綫部

1243 6

ノ全長七百五十四粒ナリ

第十 藥室 圓臺部及圓壩部ヨリ成リ圓臺部ハ約四分ノ

一ノ斜面ヲ以テ圓壩部ニ連リ圓壩部ハ腔綫部ニ連接ス藥

室ノ後端ニハ藥莢起緣部室及左右ニ抽筒子ノ抽爪部ヲ收

容スヘキ室ヲ設ク

5 第二節 閉鎖機(第二圖)

第十一 閉鎖機ハ半自動垂直鎖栓式ニシテ左ノ主部具ヨ

リ成ル

一 鎖栓 擊鐵(擊針) 擊鐵發條 發條蓋

二 槓桿 安全桿 轉臂 槓把

三 起動臂 軸 開臂 起動子

四 抽筒子(左右各二)摘把

第十二 鎖栓 其ノ形狀角柱體ニシテ上面ヲ圓形ニ四削
シ開鎖機ヲ開キタル時裝填孔ヲ成形ス

鎖栓ノ内部ハ撃鐵室ヲ成シ撃鐵ヲ收容シ下面後部ニハ撃
鐵發條ヲ位置セシムル爲圓削部ヲ設ク鎖栓後面ニ在ル段
部ハ鎖栓室ノ階段部ト相俟テ鎖栓ノ上昇ヲ制限ス

前面右下部ノ削肉セル小平面部ハ右抽筒子踵部ノ滑走路
ニシテ左側面ノ縱溝ハ左抽筒子ノ突子ノ準溝ナリ此ノ準
溝ノ上方ニ近キ部ニ準鉸ヲ螺定ス

撃鐵室ノ製作ヲ容易ナラシムル爲鎖栓後面中央部ニ準鐵
ヲ嵌入シ上面ヨリ駐螺ヲ以テ螺定ス

擊鐵室ニハ臂軸ヲ樞軸トシテ回轉スル擊鐵ヲシテ最初ハ
 鎖栓ヲ垂直ニ扛起シ次ニ鎖栓ヲ動スコトナク擊鐵ノ旋
 回スルニ適スル準面ヲ賦與ス
 第十三 擊鐵 頭部ニ擊針ヲ螺着シ駐螺ヲ以テ其ノ戻
 ヲ防止シ(當初製作ノモノニハ駐螺ヲ附セス)肩部ニ二箇ノ
 滑輪ヲ装ス滑輪ハ常ニ鎖栓内ノ準面ニ接觸スルヲ以テ鎖
 栓開閉ノ際擊鐵ト鎖栓トノ摩擦ヲ減ス後端部ニハ發條頭
 ノ耳部ヲ鉤スル爲之カ室ヲ有シ其ノ上方ニハ横方向ニ貫
 通スル圓孔ヲ有シ之ニ臂軸ヲ装シテ砲身ニ連結ス
 第十四 擊鐵發條 擊鐵ニ旋回運動ヲ起サシムルモノニ
 シテ此ノ旋回運動ニ依リテ鎖栓ノ上昇及擊發作用ヲ爲ス

撃鐵發條ノ一端ニアル發條頭ハ撃鐵ニ鉤シ他端ノ螺桿ハ發條蓋ニ螺合セラル

第十五 發條蓋 發條螺桿ニ螺合シ之ヲ回轉セハ撃鐵發條ノ彈撥力ヲ修正スレコトヲ得

發條蓋前面ニアル突起部ハ砲尾ノ刳缺部ニ嵌入シ發條蓋ノ戻回ヲ防止スルノ用ニ供ス

第十六 橫桿 橫桿ト轉臂トハ拖架右側釵ヲ隔テ相連結シ該釵ニ穿テレ轉臂孔ヲ中軸トシテ回轉ス橫桿ノ上端ハ安全桿發條及安全桿ノ水平桿ヲ入ルヘキ室ヲ有スル握把ヲ成形シ桿ノ中央部ニハ安全桿ノ安全子ヲ通スル方窓ヲ有ス

第十七 安全桿 駐螺ヲ以テ横桿握把ノ室内ニ螺着セラレ一端ハ水平部ヲ成シ安全桿發條ト共ニ握把室内ニ收容セラレ他端ハ突起セル安全子ヲ成ス

安全桿發條ハ安全桿ノ水平部ヲ壓シ常ニ安全子ヲ搖架側鉸ニ向ッテ壓着スルヲ以テ安全子カ搖架ノ方窓ニ對スル時ハ之ニ進入ス

第十八 轉臂 搖架後方右内側面ニ在リテ樞軸部ヲ以テ横桿ニ連結ス

即チ搖架ノ内側ヨリ轉臂ノ樞軸部ヲ插入シ外側ニ横桿ヲ装シテ駐螺ニテ之ヲ結合ス轉臂ノ上方ニハ内方ニ向テ突起ヲ有シ開鎖機ヲ開クニ際シ開臂ノ肩部ニ當リテ横桿ノ

運動ヲ開臂ヲ經テ臂軸ニ傳フ

第十九 起動臂、臂軸、開臂、臂軸ハ砲尾鎖栓室前方ニ水平

ニ貫穿セル横孔内ニ在リテ旋回スルコトヲ得ヘク其ノ左

端ニ起動臂右端ニ開臂中央ニ擊鐵ヲ嵌裝シテ一體トナス

故ニ開臂若ハ起動臂ヲ回轉スルハ擊鐵モ亦從ヒテ旋回ス

第二十 起動子 搖架後方左側鉸ニ裝着セラレ發條ヲ以

テ常ニ内面ニ壓セラレ搖架内面ニ斗出ス而シテ此ノ斗出

部ハ前方ヲ斜面トシ後方ヲ階段トナスヲ以テ砲身ノ後坐

スルヤ起動臂ノ上部ハ起動子發條ヲ壓下シテ通過スルモ

復坐ノ際ハ起動臂ヲ抑止シテ之ニ旋回運動ヲナサシム

第二十一 抽筒子 左右二箇ヨリ成リ左抽筒子ハ鎖栓室

12

ノ左側面ニアル相當室ニ右抽筒子ハ右側面ニアル相當室
ニ收容セラル左抽筒子ハ平扁發條ヲ有シ室内ニ緊壓シテ
滑走ノ程度ヲ適當ナラシム前端ハ藥莖底ノ起縁部ヲ接良
スヘキ抽爪部ヲ形成シ中部ニアル突子ハ鎖栓左側面ノ準
溝ニ吻合ス
右抽筒子ハ中部ニ樞軸部ヲ有シ一端ハ抽爪部ヲ形成シ他
端ニハ踵部ヲ有ス踵部ハ僅ニ鎖栓室ニ溢出し鎖栓ノ閉鎖
スルトキ踵部ハ鎖栓前面ノ剝削セル平面部中ニ位置スル
ヲ得ルヲ以テ上端抽爪部モ亦藥室内ニ進入シアルヲ得ヘ
シト雖鎖栓ノ開ク時ハ踵部ハ鎖栓前面剝削セル平面ノ上
縁ニ衝突スルヲ以テ上端抽爪部ハ反轉シテ空藥筒ヲ蹴出

逸

エ

ス

彈藥筒ヲ裝填シタル時ハ藥莖起縁部ハ兩抽筒子ノ抽爪部

ニ觸接シテ其ノ後方ニ在リ

第二十二 摘把 砲尾右側面ノ摘把孔ニ嵌装シ摘把駐子
駐子軸駐子發條ヲ以テ一組トナシ運搬間鎖栓ヲ鎖栓室内
ニ固定スルノ用ニ供ス
摘把ト駐子トハ駐子軸ヲ以テ連結シ駐子發條ハ摘把ヲ駐
子ニ對シテ常ニ引接ス故ニ摘把ト駐子トハ少許ノ離近ヲ
許スモ同様ノ旋回運動ヲナス如クス駐子ノ鎖栓室ニ突出
スル部ハ半円形ヲ成シ百八十度ノ固轉ニヨリテ或ハ砲尾
ノ駐子室内ニ入リ或ハ鎖栓ノ駐子室内ニ入ルヲ以テ鎖栓
ノ垂直運動ヲ開閉ス駐子ノ開閉兩位置ヲ表示スル爲摘把
ノ外周ニ開閉ノ文字ヲ刻シ摘把内面ノ両突起部ヲ砲尾外
面ニアル兩小孔ニ嵌入シテ其位置ニ固定ス

横桿ノ握把ヲ安全桿ト共ニ握リ安全桿ノ他端ヲ揺架右側
 釵ノ方窓ヨリ脱シ後方ヘ回轉セハ横桿ニ連結セル轉臂モ
 揺架ノ内側ニ於テ亦同様ノ回轉運動ヲナシ其ノ突子ハ開
 臂ノ肩部ヲ壓シテ開臂ヲシテ臂軸ト共ニ臂軸周ニ回轉セ
 シム此ノ回轉運動ハ一方撃鐵發條ヲ牽引伸長セシメ同時
 ニ撃鐵ヲ旋回ス故ニ撃鐵ノ肩部ニアル滑輪ニヨリテ支持
 セラレル垂直鎖栓ハ撃鐵ノ旋回ト共ニ下降ス鎖栓ノ下降

ト共ニ鎖栓左側面ニ刻シアル準溝ハ其ノ上端後方へ屈折
 シアルヲ以テ此ノ溝ニ吻入シアル左抽筒子ノ突子ニ依リ
 テ左抽筒子ヲ後退セシム此ノ際左抽筒子ノ抽爪部ハ徐々
 ニ空薬筒ヲ抽出ス而シテ鎖栓ノ下降運動ノ終期ニ近クヤ
 右抽筒子ノ踵部ハ鎖栓前面ノ剗削セル平面部ノ上端ニ衝
 突シ右抽筒子ノ上端抽爪部ヲ急激ニ後退セシムルヲ以テ
 此ノ抽爪部ハ空薬筒ヲ後方ニ蹴出ス
 鎖栓ノ下降ハ鎖栓カ撃鐵ニ阻支セラルルニ至リテ止ム
 槓桿ヲ前方ニ戻回スルトキハ撃鐵發條ノ爲鎖栓ハ僅ニ上
 昇シ左抽筒子ノ突子カ鎖栓左側面ノ同準溝ノ鈎部ニ鈎ス
 シニ至ル此ノ際右方抽筒子ノ抽爪部ハ自由ニ其ノ室内ニ

鋼

移動スルコトヲ得

第二圖ハ開鎖機ノ開閉兩位置ヲ指示ス即チA、B、Cハ開鎖ノ際ニ於ケル擊鐵滑輪鎖栓ノ上面及擊鐵發條前端ノ位置ヲ示シA、B、Cハ開披ノ際ニ於ケル同位置ヲ示ス

第二十^四 開鎖機ノ開鎖作用ノ大要左ノ如シ

彈藥筒ノ裝填ト共ニ藥莢ノ後端起縁部ハ左抽筒子ノ抽爪ヲ推進シ從テ左抽筒子ノ突子ハ其ノ鉤部ヲ脱スルヲ以テ鎖栓ハ擊鐵發條ノ爲上昇シテ砲尾ヲ閉鎖ス而レテ臂軸ノ回轉ハ起動臂ノ軸部外周ニ刻スル罅缺部ニ逆鉤ノ鉤スルニ至リテ止ム

彈藥筒ヲ裝填セサルトキ開鎖機ヲ閉鎖スルニハ指頭ヲ以

テ左抽筒子ノ後端ヲ壓スレハ其ノ突子ハ鎖栓ノ鉤部ヲ脱
スヲ以テ彈藥筒ヲ裝填シタルト同様ノ作用ヲナシテ砲尾
ヲ閉鎖ス

第二十 半自動裝置及其ノ作用ノ大要左ノ如シ

砲身復坐ヲ利用シ鎖栓ヲ自動的ニ開キ空藥筒ヲ蹴出シ裝
填準備ヲナサシムル裝置ニシテ之ニ必要ナルモノハ起動
子及起動臂ナリ

砲身復坐ノ終期ニ近ツクヤ起動臂ノ肩部カ起動子ニ衝突
シ起動臂ハ擊鐵發條ヲ牽伸シツツ臂軸周ニ臂軸ト共ニ旋
回シ臂軸ノ回轉ハ擊鐵ノ回轉トナリ從テ鎖栓ヲ下降セ
シムルコト開臂ヲ回轉セシ場合ト全ク同一ノ景況ナリト

ス而シテ空薬筒ノ蹴出ヲ終レハ恰モ起動臂ハ起動子トノ
 接觸ヲ絶ツヲ以テ鎖栓ハ僅ニ上昇シ左抽筒子ノ突子カ率
 鉸上面ニ觸ルルニ至リテ阻止ス而シテ砲ハ復座
 テ發射前ノ位置ニ復歸ス故ニ開鎖機ハ全ク開キ裝填位置
 ヲ取シ

第二十並

擊發作用ノ大要左ノ如シ

發火ヲ行フニハ開鎖機ヲ開鎖シタル後拉繩ヲ牽引スヘシ
 但シ横桿ハ發火位置ニ在ラシムヘシ
 拉繩ノ牽引ニ依リ逆鉤ハ逆鉤發條ヲ壓縮シテ水平ニ後退
 シ起動臂ノ罅缺部ヨリ離脱スルヤ擊鐵發條ノ收縮力ニ依
 リ擊鐵ノ後端ヲ牽引スルヲ以テ擊鐵ハ鎖栓ヲ支持シツツ

臂軸、起動臂、開臂ト共ニ其ノ室ニテ旋回シ、撃針ハ前進シテ
彈藥筒ノ爆管ヲ打撃ス

發火後砲身後坐シ次ニ復坐運動間自働裝置ニ依リテ開鎖
機ヲ開キ抽筒子ハ空藥筒ヲ蹴出シ次ノ裝填位置ヲ取ルコ
ト前項記載ノ如シ

第二十~~七~~ 安全裝置ノ大要左ノ如シ

安全桿ノ安全子カ搖架右側面ニ穿レル後方ノ方窓ニ在リ
時ハ轉臂ノ突子ハ開臂ノ前方旋回運動ヲ阻止スルヲ以テ
逆鉤ヲ引クモ發火セス又前方ノ方窓ニアル時ハ開臂ノ運
動ヲ阻止セサルヲ以テ發火スルコトヲ得故ニ安全裝置ノ
爲ニハ安全子カ後方ノ方窓ニアルヲ要ス

54 第三節

砲身托架 (第三圖及第四圖)

第一、十八 砲身托架 ^滿青銅製ニシテ後端垂下部ニ牝螺ヲ刻シ駐退管持螺ノ牝螺ニ啗合セシメ砲身托架ト駐退管トノ連結ニ供ス

駐退管持螺ニ啗合スル牝螺ノ兩側ニ二箇ノ護護彈褥ヲ入ルヘキ圓室ヲ設ク護護彈褥ハ砲身復坐ノ終末ニ於テ搖架ニ對スル衝突ヲ緩和ス托架ノ下面兩側ニハ全長ニ亘リ砲身後復坐ノ爲準溝ヲ有シ砲身托架上面ノ兩側ハ砲身下面ニアル準梁ニ相當スル準溝ヲ成形シ其ノ前端ハ結合栓ヲ入ルヘキ圓孔ヲ有シ左方上面ニハ結合栓ヲ阻止入ヘキ駐子 ^リ托架ノ前ス又中央上面兩側ニ各一箇ノ注油孔ヲ有シ

(C)

油口蓋ヲ以テ之ヲ閉塞ス油口蓋ハ駐螺ニテ其ノ一端ヲ固

托架前方右側面ニハ後坐長測定器ノ銜爪ヲ裝着ス

第四節 砲架(第三、第四及第五圖)

第二十八 砲架ハ左ノ各部ヨリ成ル

一 搖架

二 小架

三 大架

第三十九 搖架 砲身托架ト小架トノ中間ニ仕レ上面ニ

ハ砲身托架ノ滑走ニ便スル爲之ニ吻合スル準溝及準梁ヲ

有シ後部ハ斷面山形ニレテ後方ヘ開放シ以テ砲尾ヲ收容

ス此ノ部ニ於ケル右側面ニハ二箇ノ方窓及一圓孔ヲ穿ツ
方窓ハ安全桿ノ安全子ノ入ル所ニシテ圓孔ハ轉臂ノ擺輪
孔ナリ

搖架後端左側ニハ起動子及同發條ヲ收容シ其ノ前方ニ表
尺坐鉸ヲ螺定ス後方下面ニハ高低照準螺受鉸ヲ綴着シ内
螺頭ト駐栓ニ依リテ連結ス

搖架内ニハ駐退機機關ヲ收容シ前端ハ搖架帽ヲ以テ閉塞
ス砲尾室ト駐退機室トハ搖架底ニ依リテ區劃セラル

搖架ノ中央兩側面ニ架耳ヲ有シ其ノ右前方ニ後坐尺導溝
ヲ螺着シ之ニ後坐尺ヲ裝入ス

第三十一 搖架帽 搖架ノ前端ヲ閉塞シ兼テ射擊間治塞桿

ノ後退及前進ヲ阻礙スルノ用ヲナスモノニシテ搖架ノ前
 端ニ冠シ帽ノ頭部ヲ二重トシ其ノ中間ニ活塞桿牝螺ヲ介
 在セシメ内面ニハ活塞桿牝螺ノ形狀ニ應スル蝶形孔ヲ穿
 テ同牝螺ヲ插入スルニ供ス而シテ帽駐栓ヲ外部ヨリ装シ
 テ帽及活塞桿牝螺ノ戻回ヲ防止ス

第三十一 小架 大架ト搖架トノ中間ニ在リテ此ノ兩者
 ヲ連繫スル媒介部ニシテ左ノ主要部ヨリ成ル

小架側鉸 中央支桿 架耳牝架

第三十二 小架側鉸 左右各一箇ヨリ成リ一端ハ架耳牝
 架ノ兩側ニ各四箇ノ螺桿ヲ以テ固定シ他端ハ高低照準機
 螺軸ヲ擁シ中部ニ在ルニ箇ノ螺桿ニヨリテ兩側鉸ヲ連結

ス此ノ部ニ方向照準螺桿ノ通スル橢圓孔ヲ有ス

第三十^四

中央支桿

一端ハ前^面ヲ増^大シ架耳托架垂直

軸部ノ下端ニ嵌装スヘキ方孔ヲ有シ他端ハニ分シ方向照

準機誘導牝螺ヲ上下ヨリ支持ス

第三十^五

架耳托架

頭部及垂直軸部ヨリ成リ頭部ハ架

耳ヲ受クヘクニ枝ニ分シ各枝ニハ樞鉸ヲ有スル蓋板ヲ冠

シテ架耳ヲ抱持ス垂直軸部ノ下端ニハ牝螺ヲ刻シ小架軸

筒内ニ挿入シ牝螺ヲ以テ固定ス軸部上面ニハ注油壺ヲ螺

着シ軸筒内ニ注油スルニ供ス

第三十^六

大架

□形断面ヲナセル軟鋼板ヨリ成リ前方

上面ニハ照準機及小架軸筒ヲ入ルヘキ室ヲ穿開シ此ノ穿

開部ニ左右各一箇ノ副鉸ヲ綴著シ又穿開部ノ後方ニハ兩
 側鉸ヲ連結スル副鉸ヲ附シ大架ヲ強固ナラシムルニ供ス
 而シテ前端ニ小架軸筒ヲ後端ニ駐鋤ヲ綴著ス
 大架ノ前方ニハ車軸筒ヲ後方ニハ提棍ヲ裝スヘキ圓孔ヲ
 設ク又前端上面ニ防楯支鉸ヲ前部上面ニ托鉸乙ヲ綴著シ
 上方防楯ヲ裝著スルニ供ス
 中央兩側面ニ橢圓孔ヲ設ケ小架托筒ヲ綴著ス小架托筒ハ
 小架兩側鉸ノ短臂ヲ支持ス橢圓孔ノ前方ニ小圓孔ヲ有シ
 方向照準螺桿托鉸ヲ綴著シ方向照準螺桿ヲ保持ス
 中央下面ニ大小二種ノ防楯駐鉸ヲ綴著ス
 駐杭ヲ大架ニ裝著スヘク中央右側ニ駐杭托桿脚鐵及駐杭

枕板ヲ綴著ス脚鐵ニハ駐杭縛革ヲ附ス

第三十條 小架軸筒 垂直ナル架耳枕架軸室及水平ナル

車軸筒室ヲ有シ車軸筒室中央ニ外面ヨリ筒軸ニ直角ニ貫

通セル駐栓孔アリ架耳枕架軸室ニハ中央部ニ油溜ヲ有ス

ル青銅製ノ軸筒ヲ嵌装ス

第三十條 駐鋤 匡板及三箇ノ尖頭板ヨリ成リ匡板ノ上

面ニハ提把ヲ綴著シ其ノ兩側面ニハ提棍ノ插入孔ヲ設ク

第五節 防楯(第六圖)

第三十條 防楯ハ厚サ三粒ノ防楯鋼板製ニシテ上方防楯

及下方防楯ヨリ成ル

第三十條 上方防楯 中央及左右ノ三部ヨリ成リ各部ハ

樞鉸ニ依リテ連接セラル所要ニ應シ之ヲ折疊スルコトヲ
 得中央鉸ニハ砲身孔及照準孔ヲ穿ツ大架上ニ裝着スル爲
 托鉸甲、支鉸及支脚ヲ綴著シ托鉸甲ハ樞軸ニ依リテ防楯支
 桿ト上端ト連リ防楯支桿ノ下端ハ駐栓ニ依リテ大架上ニ
 在ル托鉸乙ニ連結シ支鉸ハ大架前端ニ支脚ハ車軸ニ在ル
 支脚孔ニ插嵌ス
 第四十一 下方防楯 砲架ノ支脚ヲナシ其ノ後面ニハ左右
 ニ各一條ノ副鉸ヲ綴著シ其ノ上端ハ樞鉸鉸ニ依リテ車軸
 筒ニ連結ス
 下端ニハ踵鉸ヲ綴著シ踵鉸ノ前方ニハ駐杭ヲ通スヘキ構
 圓孔ヲ設ク

副鉸ノ中央部ニハ防楯曳桿ヲ連結スル樞軸孔ヲ有ス
 第四十^二 防楯曳桿 下方防楯ト相俟テ砲車ニ各種ノ姿
 勢ヲ與フル用ヲナスモノニシテ左右ノ二曳桿ヨリ成リ一
 端ハ軸栓ニ依リ下方防楯ノ樞軸孔ニ他端ハ副桿ニ依リ大
 架ノ中央部ニ面ニ綴着シタル駐鉸ノ圓孔ニ連結ス駐鉸ハ大
 小二箇ヲ有シ駐鉸ハニハ一箇ノ圓孔アリテ運搬姿勢ノ際
 ニ用ヒ駐鉸大ニハ九箇ノ圓孔ヲ有シ砲車ノ各姿勢ニ從ヒ
 任意ノ孔ニ結合ス通常ノ姿勢ハ中央ノ圓孔ニ結合シタル
 場合ニシテ之ヲ中姿トナシ前端ニ結合スレハ低姿後端ニ
 結合スレハ高姿トナシ
 駐鉸大ノ後端ニハ反轉式ノ界鉸ヲ有シ防楯曳桿ノ脱落ヲ

防止ス

第六節

車軸及車輪

(第五圖)

第四十

車軸

車軸鋼製ノ直桿ニシテ車軸筒ニ挿入シ

螺シ以テ之ヲ固定ス中央ニ小圓孔アリ之ニ駐栓ヲ装シ

テ車軸ト車軸筒トヲ連結ス

軸筒ノ内方ニ圓板ヲ外方ニ坐環ヲ装シ端末ニ軸轄ヲ挿

入スヘキ楕圓孔ヲ設ケ坐環及軸轄ヲ以テ車輪ノ脱出ヲ防

ク車軸ニハ上方防楯ノ支脚ヲ挿入スヘキ支脚孔ヲ穿ツ

第四十車輪

鋼ハ三箇ヨリ成リ輻ハ其ノ數十二箇ニ

シテ轂筒内部ニハ黃銅製ノ軸筒ヲ裝入シ筒内面ニ脂溜ヲ

設ク

1267

車輪ノ中徑。米セ〇。〇。ニシテ車轍ノ間隔ハ。米セ六。ナ
リ

↓
此處ニ續ク

21

第七節 照準機

第四十

照準機ハ高低及方向兩照準機ヨリ成ル

第四十

高低照準機ノ主要ナル部具左ノ如シ

轉把

起動軸、起動軸室、起動齒輪、齒輪軸、照準螺

軸、齒輪(大齒輪、小齒輪) 照準螺(内螺、外螺)

第四十

起動軸、起動軸室ニ支持セラレ中央ニ起動齒

輪ヲ嵌装シ一端ニハ牝螺及割栓ヲ以テ轉把ヲ裝著ス

第四十

起動軸室、托筒一及托臂ニヨリ成リ托筒ハ小

架左側飯ニ連結シ内部ニ齒輪軸ヲ通ス各托臂ニハ青銅製

ノ軸筒ヲ嵌装シ各軸筒ニハ小油油孔アリ兩托臂間ニハ二

箇ノ起動齒輪ヲ入ル起動軸室ニハ齒輪被ヲ螺着シ開閉ス

磨損ノ附著ヲ防グ被ノ上方ニ樞鉸ヲ有シ
 (一八)

ルコトヲ得

第四十

照準螺軸

照準螺

外螺ヲ度クヘキ

北螺ヲ有

スル筒ニシテ兩臂ヲ有シ小架兩側飯ニ支持セラル螺軸ノ

中央上面ニ大齒輪ヲ裝シ其ノ左方ニハ小齒輪ヲ入ルヘ

キ室ヲ設ク上面ニ準螺上被ヲ下面ニ準螺下被ヲ螺著シ照

準螺ニ塵埃ノ附著スルヲ防リ

第四十一

齒輪軸

照準螺軸ノ左方臂及起動軸室ノ托筒

トノ兩室ニ收容セラレ外端ニ起動齒輪ヲ内端ニ小齒輪ヲ

裝著シ起動齒輪ノ運動ヲ大齒輪ニ傳フルノ用ヲナス

第五十二

照準螺

外螺及内螺ヨリ成ル外螺ハ其ノ外面ニ

螺軸ニ吻合スヘキ北螺ヲ有シ其ノ相對スルニ母線ニ沿ヒ

丁縦溝ヲ設ケ大齒輪ノ内孔ニアル凸稜ヲ度クニ供ス其内
 面ニハ内螺ニ啮合スヘキ牝螺ヲ有ス而シテ内外螺系ノ纏
 回方向ハ相反ス
 内螺ノ外周ニハ牡螺ヲ有シ其頭部ニ内螺軸ト直角方向ニ
 四孔ヲ有シ駐栓ヲ依テ高低照準螺度釐ニ連結シ揺架ヲシ
 テ内螺ノ上下運動ニ随伴セシム
 結構斯ルヲ以テ轉把ノ旋回運動ハ順次起動軸起動齒輪
 齒輪軸小齒輪大齒輪ヲ經テ外螺ニ傳リ之ヲ旋回セシム然
 ルトキハ外螺ハ螺軸中ニ上下ニ從ヒテ内螺ヲ上下セシメ
 砲身ニ俯仰角ヲ與フ

第五十

方向照準機ノ主

部具左ノ如シ

ノ轉把

新向照準螺桿

誘導北螺

第五十

方向照準螺桿

一端ニ轉把ヲ裝スル直螺桿ニ

之ニ中央ニ誘導北螺ヲ挿入シ兩端ハ托筒ニ依リ大架兩側
 鉸ニ支持セラル

第五十

誘導北螺

方向照準螺桿ハ右ニ上下ニアル

支臂ヲ以テ小架中央支持、相當室ニ受容セラル

結構此ノ如クナルヲ以テ轉把ヲ施同セハ照準螺桿ハ誘導

北螺ヲ左右ニ偏位シ小架ヲ以テ小架軸周ニ施同セシメ砲

身ヲ以テ大架上ニ於テ方向ノ偏移ヲ為サシムルコトヲ得

而シテ此ノ偏移量ハ左右各約五度トス

第八節

駐退機(第二回及第四回)

23 6461

第五十 駐退機ハ左ノ右部ヨリ成ル

一 駐退管

二 活塞桿

三 復生弁條

四 駐退液

第五十 駐退管ノ主要ナル部異左ノ如シ

駐退管 塞螺

壓塞螺

草環

壓塞螺

緊塞草

圧定

鑲 駐退管持螺

第五十 駐退管 鋼製ノ中空筒ニシテ全長七百十

十リ内部ハ中徑ヲ異ニセル數段ニ分ル其ノ後端内面ニ此

螺ヲ刻シ駐退管持螺ニ螺合セシメ其ノ前方ニハ塞螺ヲ螺

ニ。

定ニ駐退液ノ漏泄ヲ防止スル爲メ其ノ螺糸ノ後方ニ護膜
 生環ヲ挿入ス、前端外面ニハ牡螺ヲ刺シ圧塞螺ヲ螺着スル
 一供不牡螺ノ後方ニハ復生脊條ヲ控制スヘキ螺部有之此
 螺部ニ接シテ退液口ヲ穿テ駐退液ヲ管内ヘ注入スルニ供
 不液液口ハ塞螺及草環ヲ以テ之ヲ閉塞ス、前端内面ノ中径
 大ナル部ハ緊塞具ヲ收容スヘキ室トス
 管ノ内面ニハ八條ノ淺溝ヲ設テ駐退機ノ新制作用ヲ爲サ
 之ハ此ノ溝ノ長サハ四面概ニ之ヲ皆駐退管ノ長軸ニ平行
 之兩端ニ於テ其ノ第ナヲ減シ遂ニ零トナル
 壓塞螺一箇、草環一箇、草環一箇、及
 壓塞螺一箇、草環一箇、草環一箇、及
 鼻室ニ挿入シ外部ヨリ圧塞螺ヲ以テ緊塞ス

圧塞螺ハ其ノ内面ニ駐退管、前端外周ノ牡螺ニ吻合スヘキ。
 牡螺ヲ有シ其ノ外周ニハ圧塞螺弁條ヲ度リヘキ、剝取部ヲ
 有ス。
 圧塞螺弁條ハ其ノ後端ヲ駐退管ニ装着シ、前端ノ凸起部ヲ
 以テ圧塞螺ノ剝取部ニ入り、圧塞螺ノ自由旋回ヲ防ク。
 第五十(八) 圧塞桿 全長五百六十五、五、鋼製円桿ニシ
 テ其ノ前端ニ圧塞桿牡螺ヲ螺定シ、後端部ヲ増肉ニ其ノ周
 圍ニ青銅製ノ帶環ヲ嵌装ス、帶環ノ外徑ハ駐退管ノ内徑ト
 密接ニアリテ後復、坐間駐退管ノ内徑ト密接シ、アリテ後復
 坐間駐退管内面ニ設ケタル漏溝ノ外、液ノ通過ヲ阻障ス、
 圧塞桿ノ後端増肉部ハ中座トシ之ニ球室及銅球ヲ入シ、球

室蓋螺ヲ以テ之ヲ後方ヨリ閉塞ス
 活塞桿、青銅帶環ノ前方ヨリ斜ニ球室ニ通スル相對スル
 二円孔ヲ穿ツ
 球室ハ其ノ内周ニ六箇ノ半円溝ヲ有シ球ノ球室後端ニア
 ルヤ液ハ球ノ外周ヲ流通スル如クス
 球室蓋螺ハ中央ニ円孔ヲ有シ且球ノ蓋螺前端ニ接著スル
 モ液ノ流通ヲ妨碍セサル為メ四箇ノ溝ヲ円孔周ニ増刻ス
 然レトモ球ノ球室前端ニ接著スルヤ液ヲ吸着シテ毫モ遊
 離ヲ生スルコトナシ即チ球室ハ後端ニ隣シ液ヲ通過セシ
 ムルモ復生ニアリテハ液ノ流通ヲ阻止スル作用ヲナス
 第五十八 復生弁條 銅製四溝蛇線弁條ニシテ左巻右巻

各一箇ヨリ成リ直接ニヲ駐退管ノ外周ニ嵌装シ其ノ前端
 ハ駐退管ノ鏑部ニ後端ハ揺架底ニ支持セラレ其ノ左巻右
 巻ノ中間ニ黃銅製ノ隔鏡ヲ挿入シ弁條ノ端末ヲ保護ス
 弁條一箇ノ自然長^{四七}寸^七耗^二ニテ之ヲ駐退管ニ装入ス
 ルトキ長サ^{百二十五}耗^二圧縮セラル之ニ應スル荷重平均^{四十}
 三^三トナリ
 第三
 第一
 後坐長測定器 砲身ノ後坐長ヲ測定スル為メ
 揺架ノ右側ニ後坐尺導溝、後坐尺及同弁條ヲヨリ成ル後坐
 長測定器ヲ装置ス、後坐尺ハ弁條ト共ニ導溝内ニ在リ砲ノ
 後坐スルヤ砲身托架ニ綴着セル衝爪ハ後坐尺ヲ衝突シテ
 導溝中ヲ滑走シ其ノ凸縁ノ前端ヲ導溝表面ニ刻セル分畫

ニ對比シテ後生長ヲ測知セシメ今更ハ三百四十粒乃至四百十粒ナリ齊條ノ後生長ノ隔走ノ程度ヲ通達ナシ之ハノ用ニ供ス

第六十一 駐退液 グリセリント酸氣ナキ清澄ノ水トノ混合液ニシテ其ノ配合ハグリセリン第三改正日本藥局方ニ

規定セルモノ以上ノ純良物ニ容水一容トス(液ノ比重ハ攝氏十五度ニ於テ波米容秤二十度ヲ規準トス)

駐退管ニハ満量ヲ填實スヘク其ノ量ハ右火能ニモリ多少ノ差アルモ約〇立五トス

第六十二 駐退機能ノ必要左ノ如シ

↑
第一 射位置ニ於ケル駐退機ハ銃座構外欄青銅帶鏢カ括モ

駐退機内面ニ刻セル溝ノ起キニ在ルヲ以テ液ノ漏孔ヲ
 成形スルコトナキモ彈丸一度奔射サルハヤ火薬瓦斯ノ
 圧力ニ依リ砲ハ後坐運動ヲ始ム此ノ際液体ハ活塞桿ノ
 銅帶銀ノ前方ヨリ二箇ノ凹孔ヲ通シテ球室内ニ流入シ
 球ニ球室蓋螺ノ前端端ニ圧抑シツ、球ノ周囲ヲ流通シ
 テ球室蓋螺ヨリ活塞桿ノ後方へ流ルハト共ニ駐退管内
 面ニ流塞桿ノ後方へ流ルハト共ニ駐退管内面ト活塞桿
 周ニ生ズル漏孔ヲモ避ケテ後坐方向ニ流出スヘシ
 砲身ノ後坐運動ト共ニ駐退管内復坐弁條ヲ圧縮シツ、
 後座ス而シテ流塞桿内面ニ成形セラル、漏孔面積ハ損
 失ニシテ最大値ニ達シ此ノ最大孔漏位置ヲ經過スルヤ

一、
 漏孔ハ漸次小トナリ後堅固力ヲ~~損~~後堅固距離、米四〇
 〇ニ近クヤ漏孔零トナリ余ク後堅ヲ制止スルモノトス
 米^身砲八後堅進ハニ從ヒ後堅弁條リ彈拂力ヲ蓋ヘツ、圧
 縮セラル、ヲ以テ後堅止ハヤ弁條ハ其ノ彈拂力ヲ弁條
 之火砲^身復堅セシム此ノ際弁條ノ彈拂力ヲ繼ヒニ復堅
 運動ヲ過激サラシメカハ為ル球室ヨリ彈室前方ニ通リ
 ル液体ノ通路ハ球ニヨリ屏ク閉鎖セシメ液体ハ噴出
 管内面ニ刻セル漏孔ノヨリ流過セシム而シテ終ニ漏
 孔面積零トナリ復堅ヲ制止ス
 分
 九
 弁九節 砲車^{外部}屬品
 三
 六十 砲車^{外部}屬品ハ表尺(眼鏡共)提機(提機)祝(提機)草共(提機)砲口

蓋、砲尾蓋、表尺蓋、下方防楯縛草、肩綱及耐熱布トス
 第六十^四表尺(第六図)ハ表尺托鉸ノ先端ニ上方ヨリ挿入
 シ其ノ上面ニアル燕尾溝ニハ眼鏡ヲ嵌装シ眼鏡視軸ニ射
 角及偏流ニ應ズル傾度ヲ賦與スルノ用ヲナスモノ也ニシテ
 左ノ主要部ヨリ成ル
 横尺室、横尺及横尺蟬桿、永轉蟬軸及永轉蟬、眼鏡室鉸及
 同齊條、永轉齒輪、分画鉸及指針、
 横尺室、表尺托鉸ニ挿入スヘキ準鉸ヲ一側面ニ有シ内部
 ニ永轉蟬軸、永轉齒輪及分画鉸ヲ収容ス分画鉸軸ノ一
 端ハ左方ヘ吐出シテ分画鉸ヲ嵌ル横尺室ノ上面ハ爪狀
 準溝ヲ成形シ之ニ横尺ヲ嵌装ス横尺、

横尺ノ下面ニハ横尺室ニ嵌装スヘキ準梁ト永轉螺軸ニ由リ
スル齒弧ヲ有ス

横尺ノ上新ニハ横尺方向ニ準梁ヲ有シ之ニ準梁ヲ有スル
眼鏡室釵ヲ挿入ス深ノ内部ヲ中空トシ横尺端部ヲ収容
シ眼鏡室釵準梁内面ニアル齒弧ヲシテ此ノ横尺端部ニ
吻合セシメアルヲ以テ此ノ螺軸ノ回轉ニヨリテ眼鏡室
釵ヲ左右ニ移動スルコトヲ得而シテ横尺準梁ノ下方後
面ニハ横尺分画ヲ刻ス横尺分画ハ左右各十五ニシテ一
分画ハ射距離ノ十分ノ一ノ方向修正ヲナスニ適ス

永轉螺軸及永轉螺 永轉螺ハ永轉螺軸ニ嵌装シ永轉螺
ハ其ノ大部ヲ横尺室内縦尺方向ニ収容シ一端ヲ前方ニ斗

出シテ之ニ轉輪ヲ装ス故ニ轉輪ヲ回轉スレハ永轉螺軸
 ニアルハ永轉螺軸及永轉螺軸ハ同軸上ニ旋回スハ永轉螺軸ハ
 永轉齒輪ト吻合シ永轉螺軸ハ
 横天下面ノ齒ト吻合ス
 而シテハ永轉螺軸ハ二重螺糸ナルヲ以テ永轉螺軸ニ比シ二
 倍量ノ移動ヲナシム
 眼鏡室板及同齊條 上面ニハ縱方向ニ燕尾溝ヲ有シ眼鏡
 下面ノ燕尾條ヲ後方ヨリ挿入スヘリ其ノ溝底ニハ眼鏡
 室齊條ヲ收容ス下面ニハ横方向ニ溝ヲ有シ横天ノ上
 面溝渠ニ吻合ス此ノ溝溝内面ニハ横天螺桿ト啖合スル
 齒アリ
 眼鏡室齊條ハ其ノ後端ヲ眼鏡室板内ニ固定シ前部ヲ以テ

常ニ齊條力ノ爲メ托起セシメ前部ニハ股部ヲ有シ眼鏡
 ヲ挿入セシ時眼鏡ノ底面ノ股部ニ鉤セシム齊條ノ前端
 ハ圧子ヲ成形スルヲ以テ之ヲ指頭ニテ圧下スルハ眼鏡
 ヲ抽出スルコト得
 永轉齒輪 横天室内ニ収容セラルシ永轉螺軸ノハ永轉螺
 吻合ス
 分画銀軸ニハ永轉齒輪及分画銀ヲ嵌装シテ共通ノ軸ヲ
 十ス
 分画銀及指針 分画銀ハ其ノ外周ニ白銅製距離分画面ヲ
 有スル円盤ニシテ中央ニ円形ノ孔ヲ有シ之ニヨリテ
 分画銀軸ニ嵌装スルニ供ス



距離分画ハ零ヨリ二千五百米ニ至リ每百米ノ分画線
 及五十米ノ分画線ヨリ成ル商砲車ノ水平ヲ標示スル為
 メ射角零度ニ應ズル赤線ヲ有ス
 指針ハ横尺室ノ外面ニ固定セラレ其ノ上面ハ分画板ノ
 距離ヲ表示スル如クス
 右ノ如キ結構ナルヲ以テ今永轉螺針ノ轉輪ヲ同轉ニナ
 永轉螺針ヲ同轉スレハ一方永轉螺針ニ吻合スル横尺ヲ前
 後ニ俯仰セシメ之ニ應ジテ横尺ニ嵌装シタル眼鏡視針
 ヲ俯仰セシムルト共ニ他方ハ永轉螺針ニ吻合スル永轉螺針
 ヲ同轉セシメ之ト同軸ニ轉ル分画板ヲ指針ニ對シテ旋
 回セシム即チ分画板ニアル某距離分画ヲ指針ニ一致セ

一字上

メ眼鏡ニ依リ目標ヲ照準スルニ此ノ距離及目標ノ射角ヲ賦與セラ

構造上永轉螺軸ノ一用轉ハ眼鏡軸ヲシテ射角一度ノ俯仰ヲナサシムルト同時ニ永轉齒輪及分画板ヲシテ二十四度ノ旋回ヲナサシメ此ノ移動ハ分画板面ニ於テ長サ十二耗五ニ相當ス

第方十中眼鏡眼鏡ハ短キ三稜鏡ニシテ倍率三、視界十

二度即半米ニ付二百十米ノ廣サヲ有ス對物鏡軸即ハ眼準線ハ砲身軸ヲ含ム直直ニシテ方二百三十四耗ニシテ砲身軸ヨリ高キコト百十耗即中姿勢ニアリテ地面ニ七百十耗ナリ對物鏡ノ接眼鏡ノ間隔ハ四十六耗トス

眼鏡ノ保護製被テ附
 照準ニ降ニテハ眼鏡ノ十字ノ交截矣ヲ正ニク照準矣ニ一
 致セシムルモノトス
 第六十号 提棍第五回 水製ニテ車輪搬送ニ降シ之ヲ
 架尾ノ提棍孔ニ挿入シ運搬送ヲ把持スルニ供ス
 第六十号 駐杭 軟鋼製ニシテ下方防楯ノ踵鉤ニアル孔
 中ニ植立シ射撃ニ降ニ砲車ノ安定ヲ良好ナラシムルモノ
 ニシテ砲車運搬中ハ大架右側ニアル駐杭托飯及駐杭托桿
 ニ托シ縛草ヲ以テ之ヲ緊縛ス
 第六十号 砲口蓋 砲尾蓋 表尺蓋 褐色牛革製ニシテ
 塵埃ノ附著ヲ豫防スルニ供ス

第六十、下方防楯構造、大架ノ脚環ニ装着シ砲車ノ運
 搬中防楯成桿ヲ引懸飯ニ連結スル時確實ニ防楯成桿ヲ其
 ノ位置ニ在ラシムル為メ大架ニ對シテ索縛スルニ供ス
 第七十一、肩綱第六圖、砲車ヲ搬送シ際ニ防楯成桿
 降下其ノ一端ヲ車軸ニ鈎縛シ他端ヲ運搬手ノ肩ニ掛ク
 第七十二、耐熱布第六圖、彈丸発射ノ為メ熱シタル砲身ヲ
 直ニ分解運搬スルニ際シ之ヲ把持スル為メ右端ヲ主材料
 トシテ製シタルモノナリ

31

柄付轉螺器 三種ノ轉螺子ヲ杞軸ニ付テ体トナシ柄ヲ装
ス駐螺ノ解脫及緊定ニ使用ス

洗桿 桿ハ木製ニシテ箱中ニ收容スルニ便ナラニムル爲
メ二桿ニ別ヲ頭部ニ黃銅線ト豚毛トヲ植立ス黃銅線ハ
腔中拭淨用ニ豚毛ハ油ノ搬送ニ供ス使用セサル時ハ囊
中ニ收ム

ノ如シ

第七十七 屬品箱裝填品ノ主要ナルモノノ構造及用途次
必要ナルモノヲ裝填シ各砲車ニ一箇ヲ賦ス

第二章 屬品箱及同裝填品 (第八圖)

入槌 駐杭ノ植立及分解結合ノ際打撃ヲ與フル必要アル
 之時使用ス
 才槌 入槌ヲ使用スルハ部具ニ頻陽ヲ生スル恐アル時之
 ヲ使用ス
 仕上鉗子 両脚中一脚端ハ轉螺子ニ他脚端ハ駐槌板ニ供
 ス
 小自在螺鏑 上顎 螺機ノ柄及駐螺等ノ諸部ヨリ成リ部
 下顎
 但し此際上顎部ノ全ク之ヲ螺入シ置クモノトス
 四式葉莖爆管螺鏑 爆管ノ螺着及離脱ニ使用ス
 鉦 鉦披布中ニ荒目六吋及細目六吋ノ二種ト柄ヲ收容シ
 小修理ニ備ス
 イナ

提燈、^体及射鏡及蠟燭室、主要部ヨリ成ル
 小油罐、極軟鋼板製ニシテ蓋、刷毛ヲ附シ油ノ塗抹ニ供
 ス内部ニ常用鑛油四七〇圧ヲ收容ス
 属品箱ニハ右ノ外豫備爆管匣、豫備拉繩、^紐付小刀、索
 繩、白水綿、雜巾等ヲ收容ス
 第三章 器具箱及同装填品 第九圖
 第七十 ^四 器具箱ハ水製ニシテ内部ニハ主トシテ射撃後
 ノ手入及修理ノ為メ必要ナル器具及破損部臣交換ノ為メ
 豫備品ヲ装填ス而シテ砲車ニ門ニ付一箇ヲ附ス
 第七十 ^四 器具箱装填品中主要ナルモノ、用途及構造下
 ノ如シ、

駐退管螺鏑 頭部ヲ駐退管前端ニ挿入シ他端ニ轉桿ヲ裝

シテ駐退管ノ裝脱ニ供ス

圧塞螺鏑 駐退管螺鏑ノ轉桿ヲ併用シ頭部ノ蟹目ヲ以

テ圧塞螺鏑及駐退管持螺ノ離脱並ニ緊定ニ供シ頭部ノ端

形斜欽部ヲ以テ圧塞桿此螺ノ裝脱ニ使用ス

塞螺螺鏑 頭部ニ六角形室ヲ穿削シ他端ハ把子ヲ成形ス

球室及塞螺ノ緊定及離脱ニ用ユ

撃針螺鏑 撃針ノ裝脱ニ供ス

兩頭螺鏑 兩頭ニ大サ相異ナル嵌咬部ヲ有ス螺桿或ハ此

螺ノ着脱ニ用ユ

断鋏器 金屬線ヲ切断及接合スルニ使用ス

中油罐 一罐ニ石油一駐ニ
 駐九ノヲ收容ス
 脂罐 一罐ニ防擦脂四五ノ瓦他ノ一罐ニハバラワセリ
 止四ノヲ收容ス
 豫備品匣 豫備品匣ニハ閉鎖機駐退機及砲車ノ豫備品小
 部品ヲ收容ス
 器具箱ニハ以上ノ外提燈、注液用唧筒、漏斗等及砲車ノ豫備
 品タル堅銀、軸、復、堅、斧、條、螺、絲、釘、等并ニ材料トシテ軟過
 細鉄線、麻糸、白木綿、雜巾等ヲ收容ス
 第四章 彈藥箱及彈藥筒 (第十圖)
 第七十 彈藥箱ハ木製ニシテ短側面ニ提繩ヲ附シ蓋ハ

三。

長側面ニアル樞軸周ニ開閉之鑄鉄ニ依リテ開塞ス箱内ニ
 ハ其無彈藥筒^二十箇ヲ二列ニ段ニ收容スヘキ托架ヲ有ス
 第七十六^七 彈丸ハ彈底信管ヲ有スル破甲榴彈ノ一種ニシ
 テ之ヲ藥筒ニ挿入シテ其無彈藥筒トス
 第七十七^八 破甲榴彈^二十箇^一 全備彈量七百十^九 凡^九ニシテ其
 ノ全長約三口徑六十リ體ハ鋼製ニシテ内部ヲ炸藥室ト爲
 シ底部ニ信管ヲ螺着スヘキ螺絲ヲ刻ス
 彈体ノ内部ハ塗漆シ外部ハ黒色ニ塗染シ彈帶ノ上部ニ白
 色帶ヲ定心帶ノ下部ニ黃色帶ヲ施ス
 炸藥ハ圧搾黃色粉藥^{三十五} 瓦ニシテ紙製ノ被包内ニ收容ス
 彈丸ト炸藥トノ遊隙ニハバライニ三瓦ヲ填實ス

34

1294

所用信管ハ狙撃砲破甲榴弾信管トス
第七十八、狙撃砲破甲榴弾信管、信管体、活機、支取、
活機弁條、支筒、圍管室、雷管、雷汞壺及蓋隙ヨリ成リ
活機ニハ撃針ヲ有ス彈丸發射ノ初動ニ於テ支筒ハ支取ヲ
撓メテ後退シ活機ニ齒入シテ一体トナリ活機ニ進出ノ自
由ヲ與ヘ彈着時ニ於テ活機ハ活機弁條ヲ壓縮シテ前進シ
撃針ヲ以テ圍管ヲ衝キ發火セシメ雷汞壺ニ點火シ炸藥ヲ
爆発セシム
第七十九、藥筒、藥筒ハ藥莖、藥莖爆管、裝藥及支板ヨリ
成リ其ノ全備重量ハ五五三十一百ナリ
藥莖、黃銅製ニシテ其ノ高サ百三十一三三三トス底ノ中心ニ

中

一、穿下
 螺孔ヲ穿テ茲ニ四〇式藥莖爆管ヲ爆着ス莖口部ニハ彈室
 内筒部ヲ設ケ斜面ヲ以テ内台部ニ連接ス下端ニ起縁部
 アリ抽筒子ノ抽爪部ニ鉤スル所トス
 四〇式藥莖爆管、本体、齊火金、杵、雷管、圧縮藥、紙
 塞、及蠟塞ヨリ成リ杵ト齊火金トノ間ニ雷管ヲ裝シ撃針
 ヲ以テ杵ノ底ヲ衝クハ齊火金ノ内ニ入ルトス
 裝藥 一、号方形藥八丁瓦ニシテ直接藥莖内ニ填實ス
 支板、火藥ノ動搖ヲ妨ケ厚メ裝藥ノ上部ニ裝裝スルモノ
 ニシテボリ紙製皿狀ヲ爲シ筒ノ子紙ヲ内面ニ一枚外
 面ニ二枚貼布シ全面ニヤルニ止テ塗抹ス

3 第二部 取扱法

第一章 分解及結合法

5 第一節 制限

第八十一 分解搬送ノ為行フ程度以外ノ分解及結合ハ軍隊
及學校ニリテハ將校ノ監視ノ下ニ行ハシムルヲ要ス
第八十二 左ノ各部具ハ砲兵工廠ノ外分解スヘカラス

一、表尺托鉸

二、眼鏡但シ護謨環ヲ除ク

三、表尺

第八十三 左ノ各部具ハ修理交換又ハ精密拭淨ノ際ニ非
レハ分解スヘカラス

- 一、駐退機各部具
 二、高低照準機、方向照準機
 三、小架部具
 四、閉鎖機鎖栓、準鉄及駐鉄、準鉄、擊鐵、擊針
 第五節 分解及詰合法
 第八十、砲車ノ分解順序左ノ如シ
 一、上方防楯
 二、砲身 閉鎖機
 三、砲身托架 搖架 駐退機
 四、下方防楯 車輪
 五、高低照準機 方向照準機 小架

凡_レ各部ノ結合ニ際シテハ通_ル油ヲ施シ殊ニ摩擦部ニ
 ハ十分注油スヘシ
 射撃前ニ於テモ各摩擦部ニ注油スルコト要ナリ
 第八十四 砲身
 砲身ヲ離脱スルニハ先ツ砲身ヲ水平ニシテ上方防盾ヲ脱
 シ結合栓ヲ後方ニ約九十度旋回シテ上方へ抽出シ砲身ヲ
 手力ニテ徐々ニ後退セシメ砲身托架上ヲ全ク離脱スルニ
 至ル此ノ際砲身ノ揺架ヨリ離脱スルヤ回轉スルノ虞レアリ
 リ注意ヲ要ス
 結合スルニハ分解ト反對ノ順序及方法ニ據ル
 第八十五 閉鎖機
 閉鎖機ノ分解ハ砲身離脱後ニ於テ尤ノ順序及方法ニ據リ

3之7行7

一、擊鉄發條ノ離脱 砲身ノ左側面ヲ上方ニシテ安置

シ發條蓋ヲ螺脱シ鎖栓ヲ降下セシメ擊鉄發條ヲ壓

縮シテ發條後端ヲ其ノ室ヨリ抽出ス次ニ鎖栓ヲ少シ

ク上昇セシメ擊鉄ノ鉤部ト發條頭トノ連結ヲ解ナシ

擊鉄發條ヲ離脱ス

二、擊鉄ノ離脱 先ツ起動臂ノ駐螺ヲ脱シ右手ニテ拉

繩ヲ引キ逆鉤ト起動臂トノ吻合ヲ解キ左手ニテ起動

臂ヲ撮ミテ之ヲ上方ニ脱シタル後拉繩ヲ緩ム次ニ開

臂ト臂軸トノ一休ヲ下方ニ抽出シ擊鉄ヲ脱出ス次ニ

逆鉤及逆鉤發條ヲ前方ニ抽出ス

(其ノ室ヨリ)

31

開鎖機ノ結合ハ分解ト及對ノ順序及操作ニ據ル但シ左件
ニ注意スヘシ

後方ニ抽出ス

三 鎖栓及抽筒子ノ離脱 鎖栓ヲ上方ヨリ押シ左手ニ
テ之ヲ支ヘツツ其ノ室ヨリ抽出ス次ニ左抽筒子ノ
後部ヲ撮クテ其ノ室ノ
後端ニアツシメテ上方ニ次ニ
撮ク

一 抽筒子ヲ結合スルニハ左右共蹴出位置ニアツシメ
鎖栓ヲ下方ヨリ挿入シ左抽筒子ノ突子カ其ノ溝溝内
鉤部ニ當リタル時左抽筒子ヲ前方ニ押シ再ヒ鎖栓ヲ
押上ヘシ

二 撃鉄機條ヲ結合スルニハ先ツ撃鉄ノ鉤部ト機條頭

トヲ連結シ鎖栓ヲ開ヤタル位置ニシテ發條ヲ壓シテ
發條ノ後端ヲ其ノ室ニ挿入シ次ニ鎖栓ヲ發火位置ト
シ發條螺桿ト發條蓋トヲ螺合スヘシ

三 一部點檢又ハ擊針交換ノ爲擊針ノミヲ分解セント

欲スル時ハ砲身ヲ離脱スルヲ要セス結合栓ヲ抜き砲

身ヲ後退セシメタル後前項ノ順序方法ニ準レテ行フ

コトヲ得 但シ此ノ際砲身ヲシテ少許ノ俯角ヲ與ヘ

且鎖栓ノ鎖栓室ヨリ落脱セザル如ク注意スルヲ要ス

第八十本 砲身托架及搖架

砲身托架及搖架ヲ大架ヨリ離脱スルニハ高低照準機轉把

ヲ回轉シテ照準内螺頭ト搖架トノ鎖ノ楔孔ヲ一致セシメ

テ駐栓ヲ脱シ左方ノ架耳蓋板ノ駐栓ヲ脱スレハ大架トノ
連結ヲ絶ツヲ以テ之ヲ上方ニ離脱ス

砲身托架ト揺架トノ分解ハ駐退管分解ニ伴フモノナルヲ
以テ其ノ項ニ於テ記ス

結合ハ分解ト反対ノ順序及操作ヲ據ル但シ左ノ注意ヲ要
ス

一 據^後螺結合ニ際シテハ外螺ヲ最低ノ位置ニナシタル

時内螺モ亦最低ノ位置ニアツシタル如ク内外螺ノ位

置ヲ規定スヘシ

二 砲身托架及揺架ノ結合ニ際シ揺架及砲身托架ノ上
面ニハ十分塗油ヲ滑走ニ便ナラシムヘシ

第八十七 駐退管及復座發條

搖架内ヨリ駐退管、復座發條及坐鉸ヲ離脱スルニハ左ノ順序及方法ニ據ン

先ツ帽駐栓ヲ上方ニ脱シ搖架帽ヲ九十度旋回シ帽ト搖架
 前部トノ結合ヲ解キテ搖架帽ヲ前方ニ抽出シタル後更ニ
 九十度ノ旋回ヲ行ヒ之ヲ活塞桿頭ヨリ脱ス次ニ駐退管螺
 絲ニテ駐退管ヲ戻回シ駐退管持螺ノ螺合ヲ解ク時ハ駐退
 管、復座發條、坐鉸ヲ脱スルコトヲ得ニ砲身托架
 ト搖架トノ結合ヲ解クヲ以テ砲身托架ハ搖架上面ヲ後方
 へ滑走セシメツツ離脱スルコトヲ得

駐退管螺絲ヲ挿入スル際壓塞螺發條ト螺絲ノ摩擦部ト一

致セムルヲ要ス又駐退管脱出ニ際シ持螺トノ吻合解脱
 セハ復咄咄條ノ爲駐退管躍出スルヲ以テ注意ヲ要ス
 活塞桿ヲ離脱スルニハ圧塞螺々締一ヲ圧塞螺ヲ戻回シテ
 之ヲ脱シ活塞桿ヲ引出シ緊塞具ト共ニ駐退管ヨリ脱ス此
 ノ際駐退液ノ進出スルコトヲ以テ注意ヲ要ス次ニ活
 塞桿牝螺ノ駐螺ヲ去リ活塞桿牝螺ヲ脱シタル後圧塞螺
 圧塞環・革環・圧定環・緊塞革ヲ逐次ニ引出スヘシ又活
 塞ノ後端部ヲ分解スルニハ球室ヲ螺脱シ次ニ球室ヨリ球
 室蓋螺ヲ脱シ球ヲ抽出ス
 結合ハ分解ト反對ノ順序及操作ニ據ル駐退管及復咄咄條
 ノ分解結合ニ際シ左ノ注意ヲ要ス

- 一、緊塞革ヲ駐退管ヨリ抽出スルハ麻糸等ヲ以テ其ノ
外周ヲ緊縛シ置テ要ス之レ空中ニ放置スル時ハ擴
開スル恐レパレハナリ
- 二、駐退管内ノ駐退液ヲ出シ空虚ニナシタルトナハ管
ノ口ニ布中ヲ當テ置テハレ日光ニ觸ルル時ハ管内
面黒変スルヲ以テナリ
- 三、治塞桿結合ノ際ハ治塞桿狀螺前面ノ縦溝リニテ帽
駐栓ノ方向ニテアリシムヘシ
- 四、結合後ニハ必ス駐退液ヲ満量トナシ置テハレ
- 五、復坐敷條組立ノトキハ砂塵ヲ能ク除キ格別用破由
ヲ塗布スヘシ

110

第八十八 上方防楯

上方防楯ノ離脱ハ左右ノ上方防楯支桿ト大架上面ニ在ル
防楯支鉸トヲ連結セル駐栓ヲ脱ス両側ヨリ上方防楯ヲ上
方ニ托ケ支脚ヲ車輪軸ヨリ抜キ上方へ離脱スヘシ
結合ハ分解ト及對ノ順序ニ據ル

第八十九 下方防楯

先ツ車輪(車輪)ヲ脱シタル時ハ車軸ヲ托起スルカ或ハ大架
ノ下方ニ適當ナル支臺ヲ置キ大架ヲ之ニ托シタル後界鉸
ヲ上方ニ翻轉シ防楯曳桿駐栓ノ握把ヲ左方ニ引キ防楯
駐鉸トノ吻合ヲ絶テ防楯上部ニ在ル二箇ノ鉸鉸鉸ノ駐栓
ヲ解キ支桿ヲ後方ヘ引キ防楯駐鉸ヨリ脱出スヘシ

結合、分解ト及對ノ順序及方法ニ據ル

第九十一 高低照準機

高低照準機ヲ分解スルニハ砲身及搖架ヲ脱シタル後左ノ順序及方法ニ據ル

齒輪被駐螺ヲ脱シテ齒輪被ヲ取リ、一部點檢ノ爲ニハ齒輪被ノ上蓋板ノミヲ開クモ爾後ノ分解ニ支障ナシ

把

轉把ヲ四轉シテ高低照準螺(内外共)ヲ抽出ス次ニ轉把ノ把螺ヲ去リテ後轉把ヲ脱シ高低照準機起動軸ヲ後方へ抽出シテ高低照準機起動齒輪ニ當リテ抽出ス高低照準機起動軸室ヲ左方へ抽出シ齒輪軸ヲ左方へ抽出シテ照準螺軸内ノ小齒輪ヲ下方へ脱シ大齒輪ヲ上方へ出ス照準螺軸ヲ離脱

スルニハ先ツ小架ノ分解ヲ行ハサルヘラス
 結合ハ分解ト反對ノ順序及操作ニ據ル

第九十^二 方向照準機

方向照準機ヲ分解スルニハ左ノ順序及方法ニ據ル

方向照準螺桿右端ノ坐筒ヲ脱シ轉把ヲ回轉シテ誘導牝螺
 トノ吻合ヲ解キ方向照準螺桿ヲ左方ヘ抽出ス次ニ誘導牝
 螺ヲ抽出ス

結合ハ分解ト反對ノ順序及操作トニ據ル

第九十^三 小架

小架ノ分解ヲナスニハ先ツ高低及方向照準機ノ分解ヲテ
 ンタル後左ノ順序及方法ニ據リテ之ヲ行フ

架耳托架ノ両側面ニ在ル各四個ノ駐螺ヲ螺脱シ小架側鉸
 トノ結合ヲ離脱シ架耳托架下端ノ托螺ヲ脱シ架耳托架ト
 中央支桿トノ連結ヲ解キ架耳托架ヲ上方へ抽出ス次ニ小
 架側鉸ヲ上方へ翻轉シ側鉸ト中央支桿トヲ連結スル螺桿
 及小架兩側鉸間ノ螺桿ヲ脱シ小架兩側鉸ヲ逐次ニ抽出ス
 結合ハ分解ト及對ノ順序及方法ニ據ル

第九十四 車輪及車軸

車輪ヲ離脱スルニハ先ツ軸轄ヲ上方ニ抽出シタル後坐環
 ヲ外方へ脱スヘシ
 車輪ヲ脱シタル後ハ再ヒ坐環及軸轄ヲ車軸ニ装シ置テ
 通常トス

車軸ヲ大架ヨリ離脱スルニハ先ツ坐環及軸轄ヲ去リタル
 後車軸中央部ノ駐在ヲ脱シ一方ノ圓敏ヲ脱スレハ他ノ一
 方ヘ車軸ヲ抽出スルコトヲ得
 車軸筒ハ一方ノ車軸筒牝螺ヲ螺脱スレハ取外ツスコトヲ
 得ルモ通常離脱セサルモノトス
 第三節 分解搬送ノ爲行フ分解及結合法
 第九十申 分解搬送^送ノ爲行フ分解ノ順序左ノ如シ
 一 上方防楯
 二 砲身
 三 砲身托架及搖架
 四 下方防楯

五、車輪

第九十條 上方防楯ヲ砲車ヨリ離脱スルニハ第八十八ノ方法ニ據ル

第九十六

砲身ヲ離脱スルニハ第八十四ノ方法ニ據ル

第九十七

砲身枕架及搖架ノ合成体ヲ離脱スルニハ第八

十六ノ方法ニ據ル

第九十八

下方防楯ヲ離脱スルニハ第八十九ノ方法ニ據

ル

第九十九 車輪ヲ離脱スルニハ第九十三ノ方法ニ據ル

第一百

下方防楯ハ時トシテ車軸ヨリ離脱スルコトナク大

架、車軸、

下方防楯ノ合成体ヲ搬送スルヲ便トスルコト

アリ又

要スルハ車軸ヲモ離脱スルコトアリ此ノ場合ニハ

第九十三ノ方法ニ據ル

第百廿二 分解搬送ノ姿勢ニアル砲車各部ノ結合法ハ第二節ノ各項ニ準シテ之ヲ行フ

第四節 駄載卸下一ヲ爲行フ分解及結合法

第百廿三 駄載ノ爲行フ分解法ハ概テ第二節ノ順序及方法

ニ據リテ如ク二馬ニ駄載ス

一、砲身 砲身枕架 揺架合成体及車輪

二、大架合成体(車軸共)及上下両防楯

第二章 取扱上ノ注意

第百廿四 材料ノ分解及結合ハ拭淨検査等ノ爲必要ニ應之
之ヲ行フヘ中モノヤリト雖之ヲ急スルハ害アルヲ以テ

リニ行フヘカラス殊ニ精度ヲ害スヘキ虞アル部具ニ於テ
然リトス

分解及結合ハ第一章ニ示ス方法及注意ニ従ヒ正シク之ヲ
行ヒ分解ニ際シテハ各部具ヲ順序ニ併列シ毀損汚染混亂
紛失等ノコトヲヤリ要ス

第百四^五 炭條ハ凡テ過度ニ伸張又ハ壓縮スル時ハ其ノ機
能ヲ害スルニ至ルモノナルヲ以テ勉メテ本然ノ状態ニ在レ
ラシムルヲ可トス故ニ分解ノ場合等ニアリテハ蓋リニ之
カ伸縮ヲ試ム可カラス

第百五 擊鉄炭條ハ其ノ炭條ノ弱キニ過クレハ爆管ノ不
點火ヲ来スコトアリ又強キニ過クレハ半自動ニヨル空筒

ノ蹴出十分ナリサルコトアルヘシ然レトモ寧ロ爆管ノ不
 點火ナキヲ期スル爲着條力ヲ十分ナリシムル如ク着條蓋
 ヲ緊定ス可シ

第百六 駭載又ハ分解搬送ノ爲砲車ヲ分解シタル時ハ各
 摩擦部及滑走部ニ塵埃土砂ノ附着セサル様注意ヲ要ス

第百七 砲架ヲシテ低姿勢ヲ取リタル時ハ水平地ニ在
 リテハ防楯曳桿及高低照準機ノ複螺ノ端未地面ニ觸接ス
 ルモノナルヲ以テ豫メ之ニ通スル地点ニ位置セシムルカ
 又ハ此觸接部ヲ少シク掘下スルヲ要ス

第百八 各部品ノ破損若クハ不具合ハ假令其ノ程度微少
 ナリト雖其ノ儘之ヲ使用スルコトナク速ニ其ノ原因ヲ精

査し手入交換若ハ修理ヲ加フ可シ

第百九 兵器ノ修理ニ關シテハ兵器取扱規則ニ據リ極メ
テ周密ナル注意ヲ以テ之ヲ行フヘシ若シ一時的姑息ノ手
段ヲ施セハ之ヲ爲遂ニ其ノ部品ヲ廢毀スルニ至ルコトアル
ルヘシ

第百十一 凡伎倆ニ伴ハサル修理ハ之ヲ實行ス可カラス緊
要ナル部分ノ鉋削作業ニ於テ殊ニ然リトス

第百十二 豫備品ハ豫メ其ノ適合ヲ試ミ置キ決シテ不適
合ノ豫備品ヲ使用ス可カラス

第三章 射撃上ノ注意

第百十三 開鎖機ヲ開鎖シタル際ハ必ず安全桿ノ安全子

ヲ確實ニ發火位置ノ方窓ニ吻合セシムヘシ射撃間衝撃ノ
爲安全子ノ其室ヨリ脱出シ槓桿及轉臂ノ後方ヘ反轉スル
コトアリ此ノ際砲身ノ復座スル時開臂ハ轉臂ノ突子ニ衝
突シテ復座ヲ妨害スルヲ常トス此ノ如キ時ハ臂ノリ以テ
砲身ヲ前方ヨリ壓シ後座セシメ槓桿ヲ正位ニ復スルヲ
要ス

第四百十 拉繩ヲ引キテ發射セシムレハ拉繩ハ砲身ト共
ニ後退スルヲ以テ拉繩ヲ引キタル後直ニ手ヲ拉繩ヨリ去

ルヲ要ス

第四百十 藥筒不發火ナル時ハ約十五秒時間ノ後注意シ
ツツ徐々ニ開鎖機ヲ開キ彈藥筒内ハ藥莢爆管ヲ交換スヘ

カ

ニ再三拉繩ヲ牽引スルモ発火スルモノニ非ス
不發火ヲ生スル主ナル原因尤ノ如シ

一、撃針ノ突出少キ

二、撃針簧條弱キ

三、過度ノ塗油ノ爲撃針簧條ノ機能敏減ナリ

四、射撃筒瓦斯ノ漏洩多シテ蠟燭ノ撃針室ニ固着多

キ
五、標管底ノ蠟燭割過多ナル

第百十五、射撃ヲサササル時ハ必ズ閉鎖機逆鉤ヲ牽引シ

發火後ノ位置ヲ取リシメ置クヘシ

第百十六、射撃間若シ駐退液ノ漏出スルコトアラハ其ノ

原因緊塞革又ハ革環ノ損壞ニ非ニ限リハ壓塞螺又ハ塗液

北塞螺ノ螺定不充ナルニアリ
 第百十セ、後座長ハ三十四粒乃至四十三粒ナルヲ要ス故
 ニ射撃間常ニ後座長ニ注意シ若シ三十四粒ヨリ小ナルヲ
 又ハ四十三粒ヨリ大ナル時ハ射撃ヲ中止シテ其ノ原因ニ
 関シ調査スルヲ要ス
 後座長ノ過大ナルハ多ク駐退液ノ不足ナル場合ニ生起ス
 故ニ此際駐退液量ヲ検査シ液ヲ増注スヘシ而モ尚後座長
 過大ナル時ハ射撃ヲ中止シテ他部ヲ点檢スヘシ
 第百十八、復座發條ニハ保護ノ目的ヲ以テ適當ノ格納用
 礦油ヲ塗ルヘシ復座發條ハ少許ノ變形ヲ呈スルモノニ在
 リテモ其ノ張力ヲ減セサル限りハ使用スルコトヲ得若シ

折損セシ時ハ砲身後座量頗ニ不足スルカ或ハ後座間揺
架内ニ於テ輾音ヲ發スルカ等ニ由リテ之ヲ推知スルコト
ヲ得

第一百十九

少量ナル後座不足ハ射撃上敢テ直ニ憂懼スル

ニ足ラスト雖後座不足ヲ生スルト共ニ後座量モ亦増大ス
ル時ハ後座ノ折損セルカ或ハ駐退液量ノ不足ナルニ因ン
モノナルヲ以テ注意ヲ要ス又多數連續發射ニ於テ後座量
ニ變化ナク單ニ後座不足ノミヲ生スルハ液ノ膨張ニ因ン
カ或ハ氣化体ノ張力ニ因ン故ニ此ノ場合ニハ注液口塞螺
ヲ緩メテ少量ノ氣體或ハ液ヲ排出スルヲ可トス
第一百二十一 駐鋤ハ十分ニ地中ニ啣入シ置テヲ必要トス者

47

土地硬クシテ吻入セサル時或ハ柔軟ナル地ニアリテ直
 當ナル駐鋤止メノ出来サル時ハ發射ニ際シ砲身ノ後退ス
 ル虞ナキニテ然ル時ハ砲手ヲシテ一時防盾外縁延線
 外ニ出テシムヘシ

第百二十ヤ 低姿勢ニテアリテ砲身ニ大射角ヲ賦與スル時
 又ハ依托射撃ニ於テ架尾ノ位置高キ時ハ砲身後座スルヤ
 大架上面ニテ衝突スルコトプルヲ以テ必ス揺架後方下端
 ト大架上面間ニハ少クモ三糎ノ間隔ヲ有セシムルヲ要ス
 第百二十一ヤ 稍々長時間ニ亘リテ發射ヲ連續スル時ハ各
 注油壺殊ニ砲身托架ノ注油口ニ注油スヘシ
 第百二十二ヤ 長時間急激ニ射撃セタル後直ニ分解搬送ヲ

ャス如キ場合ニ在リテハ砲身ニ直接觸接スルコトヲ避ケ
 耐熱布ニテ纏包セラル後之ヲ肩上ニ擔ウヲ可トス
 第百二十號 射撃筒ニハ高底照準螺受銀、架耳蓋銀、下
 方防楯、蓋銀等各駐栓ノ離脱ニ居ラサルヤ防楯曳桿駐栓
 確實ニ駐銀孔ニ挿入シ同發條ノ裏換セサルヤ砲身結合栓
 ハ挿入セラレ其ノ駐筭ノ下方ニ向ヒアルヤニ注意スヘシ
 第百二十一號 表尺托銀ニ表尺裝着セアル時壓螺ハ確實ニ
 緊定セアルヘシ又眼鏡ハ雨水ニ觸ル、ヲ有害トス故ニ力
 メテ之ヲ防護スヘシ射撃後直ニ運搬スルニ際シテハ必ラス
 眼鏡ヲ表尺ヨリ離脱スルカ又ハ表尺ト共ニ表尺托銀ヨリ
 離脱スルヲ要ス此ノ注意ハ殊ニ分解搬送ノ際ニ於テ必要

第百二十ナ 復生ニ際シ鎖栓ノ自然ニ上昇開鎖スルコト
 アリ是レニハ發射ニヨル振動ノ爲ナルモ又尤抽筒子
 ノ突子ト駐飯トノ間ノ接面ノ磨滅ニタルカ或ハ起動臂端
 ノ磨滅ニテ起動子トノ連接ヲ過早ニ絶ツニ起因スルモ
 ノヤリ然レトモ此ノ如キ故障ハ射撃ヲ中止スルヲ要セサ
 ルモノヤルヲ以テ射撃後原因ヲ探求シテ之ヲ修理交換ヲ
 ナスヲ可ヤリトス

49

1323

砲身重量

重量(閉鎖機共)

纏度(右旋)

腔綫數

腔内彈丸ノ徑路

腔綫部ノ長

全長(砲口面ヨリ砲尾面ニ至ル)

口徑(隔牆上ニテ測ル)

砲身

44 狙撃砲數量表

44 附録

七 社

四二 厩

六 度

一六

〇 米七八五

〇 米七五四

一米〇四〇

三七 耗

砲架

搖架重量(駐退機、發條共)

大架重量(小架、照準機、車軸共)

駐退液ノ種類

同液ノ滿量

最大後坐長

復坐發條數

防楯

上方防楯重量

下方防楯重量

照準機

二二 呎

四六 呎

グリセリンニ
水一ノ混合液

約〇、五五

。米四三。

二箇

一六 呎

一九 呎

1325

車轆間隔

重量(三箇)

中徑

車輪

最大俯角

最大仰角

揺架移動角

低姿

中姿

高姿

低姿

中姿

高姿

左右各

五度

二〇度

一五度

七度

二二度

二一度

一七度

〇米七

二三釐

〇米七六

↑砲列砲車ノ長
↑砲車全重量
水平ナル砲身軸高
高低中姿
照準
觀線高
中姿
彈藥筒
破甲榴彈(全備重量)
信管ノ種類
炸藥ノ種類重量
裝藥ノ種類重量
全備彈藥筒ノ重量
彈丸ノ初速

二米一五
一七五
●米七
●米六
●米三
○米七一
○米七一
狙撃砲破甲榴彈信管
粉狀黃色藥 三五瓦
一號方形藥 八、瓦
一號。四
五三。米



實錄一四八號二

九月二十日

圖書印



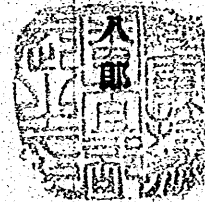
甲 第二三三

狙撃砲取扱法草案附圖送附ノ件通牒

大正七年九月二十日

陸軍技術審査部長島川文

陸軍省副官 和 田 龜 治 殿



本月九日甲第二一八號ヲ以テ送附致候狙撃砲取扱法草案附圖中後送
ノ分第十一圖百二十部及送附候也

陸軍



其第一四八號 共一

九月九日

原執類、左記同附



甲 第二一八號

狙撃砲取扱法草案附圖送附ノ件通牒

大正七年九月九日

陸軍技術審査部長 島川 文大郎

陸軍省副官 和田 龜治 殿



甲 第二一八號
大正七年九月九日

本月二日附照會ノ狙撃砲取扱法草案附圖（自第十一圖）中（自第一圖至第十圖）各一二〇部及送附候也

追テ第十一圖ハ目下調製中ニ付出來次第送附可致候



銃九月十日

陸

軍